

遠藤周作の小説「沈黙」がほぼ原作通りに映画化された映画を見ました。江戸幕府が誕生して間もない、前近代という時代は、権力者がいかに暴力的に支配する世界であるかを実感しました。弱い、貧しいものが真っ先に餌食にされることも分かりました。心も体も痛くなるような映画でした。



カトリック新聞オンライン より

主人公のセバスチャン・ロドリゴ司祭のモデルになった人物はイタリア人貴族で、イエズス会ジュゼッペ・キアラ司祭(1602-1685)であり、キリシタン弾圧によって棄教し、軟禁され、岡本三右衛門という名を与えられ、幕府の禁教政策に関わったと記録されています。

一方彼の故郷・シチリア島のキューザ・スクラファニ(Chiusa Scalfani)では彼が帰国しないので日本で殉教したと受け止められ、聖ニコラ教会に「とがった竹で首を刺され、長い苦しみののち帰天」と記されたキアラ神父の殉教画(左)が飾られて、記念しているとのこと。

私はキアラ司祭の棄教は、自己犠牲の形であり、キリシタンの命を救うために、罪と恥を身に引き受けた殉教だと、悲しむとともに敬意を表します。

「沈黙」のテーマは題が示すように、「過酷な迫害の苦難にあっても神は応えてくれない」、「神は沈黙している」と考えざるを得ないことから、「神はいないのでは?」という絶望感に至る信仰者の心象を描いています。神の声は物理的な音波による声ではなく、あくまでも心で受け止める声です。日本人は苦難や試練に耐えられなくなると、「神も仏もあるものか」とよく口にするようです。それはつまり、神を自分の希望、願望、欲望を叶える対象と見なし、それらが叶えられないと神の存在そのものを否定するという事ではないでしょうか。ご利益宗教とっていいでしょう。

ところが聖書では、神は言われた。「光あれ。」(創1:3)と始まり、神の声により世界は創造されています。また、初めに言葉があった。言葉は神と共にあった。言葉は神であった。(ヨハネ1:1)と、沈黙どころではなく、言葉そのものとして存在し、「どうぞお話しください。僕は聞いております。」(サム上3:10b)と、純真なサムエルの願いに応え、預言者たちに語りかける神であると、キリスト者は信じているのです。神の声を聞くことが出来なくなるほどの苦しみは、暴力による支配によってもたらされたのです。

もう一つのテーマはキリシタン禁制です。これは一つの「法」でした。「法」に従って生きれば、正しい立場に立っていると思い込む多くの人々がいます。それは「立法」した側に、即ち、権力、財力、地位に近づこうとする姿勢といえるでしょう。法の中身が果たして正しいものなのかを吟味したのでしょうか。前近代という時代は、人権について考えられなかった時代で、人間の心、命を砕く暴力でも、権力者の都合で、「法」とされていたのです。徳川幕府はポルトガルとの盛んな交易により、武器を得ましたが、同時にキリスト教の世界制覇を狙ったイエズス会が国内に強力な地盤を持ち始めたことを知りました。幕府は、植民地化される危険性を察知し、回避するため、当時40万人近くの信徒をすでに獲得していたキリシタンを1614年に禁制とし、「鎖国」の政策を取り、ある意味ではアジア諸国のような悲劇を避けることが出来ました。この「法」を実施させるために、役人は効率を上げようと、過酷になっていきます。アイヒマン裁判を取材したハンナ・アーレント氏が「悪は悪人が作り出すのではなく、思考停止の凡人が作る」と言っているように、「法」の中身を考えず、「法」に従っていることが正しいことだと思ふことから、悲劇が始まるのです。

World Watch Monitor <https://www.worldwatchmonitor.org/news/4812440/4812457/4836318> の2017年1月11日の報道によれば、アジアの民族主義、アフリカのイスラム過激派により、50か国の国々で、キリスト者が聖書を持つことや、礼拝を禁止され、暴力をうけ、財産没収され、殺害されているという迫害が報告されています。これに対して、どのように声をあげたらいいのでしょうか。